

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18601010
 研究課題名（和文）
 総合的な学習の時間を活用した地域活性型のまちづくり学習の開発に関する研究
 研究課題名（英文）
 Study on the development of the activated community design study in the period for integrated study
 研究代表者
 篠部 裕（SHINOBE HIROSHI）
 呉工業高等専門学校・建築学科・教授
 研究者番号：10196412

研究成果の概要：総合的な学習の時間を活用したまちづくり学習の実践事例から地域活性化に関連するまちづくり学習の実践上の効果や課題を把握すると共に、専門教育と連携した地域活性型のまちづくり学習を立案・実践・評価した。地域活性型のまちづくり学習は学習対象、学習成果の情報発信も重要であるが、外部支援者の一つとして都市計画を学習する専門教育機関の学生の活用が、支援を受ける側、支援をする側の両者にとって有効であることを示した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	300,000	90,000	390,000
年度			
総計	1,800,000	330,000	2,130,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学・都市計画・建築計画

キーワード：計画論、都市・地域計画

1. 研究開始当初の背景

(1) 2002年より総合的な学習の時間が正式にスタートし、これまで全国で様々な総合的な学習が取り組まれてきた。総合的な学習は、個々の教科の枠組みを越え、児童・生徒自らが学習課題を見つけ、問題解決能力を培おうという点に特徴がある。これらの総合的な学習の中で、特色ある学習プログラムの実践は、学協会や教育集会等における各種研究論文として発表されて来ており、今後の総合的な学習の実践を検討する上で貴重な情報となっている。

今後、より良い総合的な学習の発展に向け

ては、既往の優れた事例研究・報告の考察を通じて、総合的な学習の成果を検証すると同時に、今後のあり方や改善課題を検討することが必要である。

(2) 市民参加のまちづくりも広く普及しつつあるが、地域社会の人材と効果的に連携・協力したまち学習やまちづくり学習は、単に教育的効果だけでなく、地域活性化やコミュニティの再編に対して大きな波及効果をもたらすものと考えられる。

加えて、大学・高専などの高等教育機関では知の地域還元という視点から、地域貢献活動が重要な課題となっており、高等教育機関

と連携したまちづくりの推進が期待されている。

今後は行政、高等教育機関などの専門家による教育支援（出前授業など）だけでなく、将来専門家をめざす学生の PBL 形式の地域教育支援も求められる。

2. 研究の目的

(1)総合的な学習に関する既往の学術研究論文の横断的・体系的なレビュー調査や先進事例のヒアリング調査を通じて、これまでに組み込まれてきた総合的な学習の成果や成功の要点、問題点などを総合的に整理し、今後の総合的な学習のプログラムづくりに資する基本的な方向性を明らかにする。

(2)まちづくり学習を単に教育的な側面から扱うだけでなく、その学習成果を実際のまちづくりへと展開させる学習モデルとする「地域活性化型のまちづくり学習」の実践と評価を通して、総合的な学習を実際のまちづくりに活用していくための諸条件や課題を明らかにする。

(3)地域社会と連携した総合的な学習の実践では、高等教育における専門教育と有機的に連携した学習プログラムを立案・実践し、その評価を通じて両者にとって効果的な教育方法のあり方を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)既往の総合的な学習の時間におけるまちづくり学習の実践事例を把握するため、住宅総合研究財団の「住まい・まち学習」実践報告・論文集 1～6（2000～2006年）を分析資料とし、総合的な学習の時間におけるまちづくり学習の実践内容（学習対象、視点、内容、支援者、問題点など）を整理し、成果と課題を把握する。

(2)まちづくり学習の先進事例や成功事例を対象に、学習実践者（教員）や学習支援者（NPOなど）に対するヒアリング調査を行い、まちづくりを学習内容とする教育効果や地域活性化に資するまちづくり学習の実践の要点や課題を把握する。

(3)既往のまちづくり学習の実践成果を基に、地域活性化型のまちづくり学習の学習プログラムを立案し、実践する。外部支援者においては高等教育機関の活用・連携という視点から、呉工業高等専門学校（都市環境工学科、建築学科）で都市計画を学習している学生を学習支援者に活用し、同機関が立地する呉市内の小学校を実践校として設定する。

具体的には、2007年4月～10月に、呉市立阿賀小学校の6年生の児童（28名）を対象に総合的な学習の時間（合計16回、28コマ）に「もっと知ろうよ阿賀のまち～阿賀の昔・今・未来～」というテーマで実践した。

(4)まちづくり学習の実践の評価については、

児童、教員、支援学生に対するアンケート調査、ヒアリング調査を実施し、まちづくりを学習対象とした総合学習や支援学生を活用した学習方法の学校教育面での有効性や、専門教育課程の学生が児童を学習支援することを通しての専門教育面での有効性を評価する。

加えて、地域活性化という面では、実践したまちづくり学習の成果を「まち新聞（A3判1枚、両面印刷）」にまとめて地域住民へ情報発信（配布）し、児童が総合的な学習のテーマとして「まちづくり」を対象とすることの是非や地域活性化への有効性、諸課題を把握、整理する。

4. 研究成果

(1)既往論文（「住まい・まち学習」実報告・論文集1～6（2000～2006年）、総報告・論文数：189）のレビュー調査から、総合学習におけるまちづくり学習としては35事例が抽出できた。これらの報告のうち9割が小学校での実践事例であり、その内訳は4年生から6年生で行われるものが8割近くを占めていた。

まちづくり学習の実践時における外部支援者としては、地元住民や専門家の連携事例が多い。教員以外のこれらの外部支援者との連携は、児童の多面的・肯定的な評価の機会を増やし、児童の学習態度や意欲の向上を促すという成果報告も多数みられた。

また、学習成果については、現状を調査するだけでなく、学習者自身の視点からまちづくりのあり方を提案する計画提案型の学習事例も約7割みられた。

事例報告からみた今後の課題としては、教員の授業準備の負担を軽減し、学習の質を高めるための外部支援者との連携のあり方、その場合の外部支援者に対する費用の確保、他の学校行事などの兼ね合いからの授業時間の確保の難しさなどが課題として把握できた。

(2)先進・成功事例における教員・外部支援者に対するヒアリング調査からは、両者とも児童・生徒によるまちづくり学習と言えども、地域活性化に資するまちづくり学習は、地域社会との連携の仕方しだいでも可能であり、教員に足りない部分を外部支援者（専門家など）に補ってもらおう意識を教員自身がもつことが必要であるとの回答を得た。

外部支援者との連携は、学校側と外部支援者側の両者が学習プログラムを立案・調整する上で、事前打合せなどに時間と手間を要する。両者の連携を効果的に実行するためには、外部支援者が積極的に教育現場へ支援者として関与しようとする姿勢が望まれる。

また、学習プロセスの中で、児童・教員・外部支援者が地域住民を学習に巻き込み、学

習成果を地域に積極的に情報発信することで、児童の学習（取り組み）が住民やまちづくりを動かすことに発展するとの指摘も得られた。

一方、大規模校では教育機会の公平性という観点から、一部のクラスのみを支援することには学校側に抵抗感があるため、複数のクラスを対象とした学習を実践するためには、多数の外部支援者を確保するなどの課題が教育現場に存在することも把握できた。

(3)地元のまちをテーマとしたまちづくり学習の実践は児童の地域に対する愛着を育み、魅力の再発見や関心度を向上させる上で有効であることを児童アンケート調査や指導教員に対するヒアリング調査結果から検証できた。

また、地元住民を対象としたアンケート調査結果からは、地元の街をテーマとした学校でのまちづくり学習の実践に対する地元住民による評価は総じて高く、地元住民の中でも60代以上の住民に外部支援者としての協力意向が高いことが分かった。このような結果から、今後は、多様な知識・体験の蓄積が豊富な定年後の高齢者を、まちづくり学習の外部支援者として積極的に位置づけ、活用することが地域社会との連携上、効果的であると考えられる。

(4)身近な地元の街を題材としたまちづくり学習は、学習プロセス上、住民の考えや想いを聞き、住民の要望をまとめるきっかけが生まれることから、地域社会を活性化する上で可能性を有している。しかし、今回のまちづくり学習の実践では、児童や教員の発意を最優先し、学習対象には児童の希望テーマを採用した。このため、学習テーマの一部には、児童の生活感から逸脱した内容（施設規模が大きく、普段の生活からはなじみのないもの）を選定し、問題解決に至らない学習テーマもみられた。

地域活性型のまちづくり学習という視点から学習テーマを設定する場合、学習に先立ち地元の住民に学習テーマを尋ね（公募し）住民のニーズに配慮した学習テーマの設定が望まれる。住民から学習テーマを依頼される形式とすることで、児童・生徒・学生に責任感が芽生え、学習のモチベーションをより高めながら、住民意見や地域の状況に配慮した情報収集やまちづくり提案が可能となる。この点が学習テーマ設定上、重要である。

(5)高等教育における専門教育との連携という観点から、今回は工業高等専門学校の建築学科や環境都市工学科（土木系）の学生を、小学校でのまちづくり学習の外部支援者に活用した。外部支援者として学生を起用することは、授業の個別指導（少人数教育）の充実が図られ、児童・教員・住民に高く評価された。

加えて、外部支援者として学生を活用することは児童に対する教育の充実に留まらず、学生自身の能力（コミュニケーション能力、段取り力など）を高める相乗的な教育効果を生む教育方法として有効であることを検証できた。

支援学生は都市計画におけるまちづくりの手法である住民参加によるワークショップに通じる疑似体験を通し、専門知識を持たない一般市民（児童）に分かり易く説明・助言する能力を習得するよい機会となった。

最後に今後の研究課題と展望を以下に示す。

(7)今回は学習の最終成果は「まち新聞」の住民配布という形式で情報発信したが、一方的な情報提供にとどまった。まち新聞の成果をもとに、地元住民を交えた発表会・報告会という形式が可能となれば、学習成果に対する講評や評価も直接住民から聞くことができ、多様な評価を得る機会の確保や達成感をより高めることも可能になったといえる。

また、学習プロセスにおける地域住民とのやりとりも極めて少なかった。学習プロセスの途中段階や最終段階に、地域住民を積極的に関係付けるなど双方向的な学習プロセスの設定が課題といえる。

(8)今回の地域活性型のまちづくり学習の学習プログラムは、児童を主たる学習者として設定したため、支援者である学生の専門教育への配慮が希薄であった。現在、高等教育機関における技術者教育では、エンジニアリングデザインの実践が強く望まれている。この点、地元の都市計画課題に配慮した「地域活性型のまちづくり学習」は、都市計画分野の学生が取り組むべき格好のエンジニアリングデザイン教育の対象となり得る。学習者に児童・生徒・学生を設定した教育の実践が今後はこれまで以上に望まれ、今後はエンジニアリングデザインに着目した教育の実践や評価が研究課題とされる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

篠部 裕、新田瑠衣、山岡俊一、学生支援を伴う小学校におけるまちづくり学習の実践と評価、論文集「高専教育」第32号、pp.477～482、2009、査読有

篠部 裕、新田瑠衣、田中美希：総合的な学習の時間におけるまちづくり学習の実践と評価 学生支援を伴う地域活性化を考慮したまちづくり学習のあり方、「住まい・まち学習」実践報告論文集9、pp.9～14、2008、査読無

新田瑠衣、篠部 裕：総合的な学習の時間

におけるまちづくり学習の実践に関する基礎的研究、「住まい・まち学習」実践報告論文集 8、pp.61～64、2007、査読無

〔学会発表〕(計 3 件)

新田瑠衣、篠部 裕、田中美希：総合的な学習の時間におけるまちづくり学習に関する基礎的研究 その1 学生支援を伴うまちづくり学習の実践と評価、日本建築学会中国支部研究報告集、第 31 巻、701、2008、査読無

篠部 裕、田中美希、新田瑠衣：総合的な学習の時間におけるまちづくり学習に関する基礎的研究 その2 地域活性化を考慮したまちづくり学習のあり方、日本建築学会中国支部研究報告集、第 31 巻、702、2008、査読無

新田瑠衣、篠部 裕：総合的な学習の時間におけるまちづくり学習の実践に関する基礎的研究、日本建築学会中国支部研究報告集、第 30 巻、pp.765～768、2007、査読無

6 . 研究組織

(1)研究代表者

篠部 裕 (SHINOBE HIROSHI)

呉工業高等専門学校・建築学科・教授

研究者番号：10196412

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし